

バレーボールの文化的な価値の再検討 — 中学第3学年の実践を事例として —

稲垣 友裕*・岡野 昇**・加納 岳拓**・大隈 節子**

Reconsideration of the Cultural Value of Volleyball
-A case study of the practice of the third grade of junior high school-

Tomohiro INAGAKI, Noboru OKANO, Takahiro KANO and Setsuko OKUMA

要 旨

本稿は、バレーボールの文化的な価値を再検討するとともに、中学第3学年の実践をもとに生徒が文化的実践に参加する過程を事例から明らかにすることを目的とした。その結果、バレーボールの文化的な価値が「床を奪い合うこと」から、床を奪い合うことを土台としながら「ネット際（面）を奪い合うこと」に変容していることが明らかとなった。さらに、バレーボールの文化的な価値を質的に深めていくチーム内の変容を見ていった結果、「攻撃時間が短くなること」と「コンビネーション攻撃が生まれてきたこと」がきっかけとなり、より高度な駆け引きが生まれていることが明らかとなった。これらの結果は、バレーボールの文化的な価値は、歴史的・文化的な変遷によって変化しており、その価値の変化を捉えておくことによって、生徒の学びの深まりを見取ることができる視点となることを示唆する。

キーワード：中学校体育、バレーボール、攻撃時間、コンビネーション、エピソード記述

1. 緒言

1.1 問題と目的

2017年3月に改訂された新学習指導要領より、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が求められている。ここで示されている授業改善とは、単なる学びの方法論の転換ではなく、「何を学ぶか、学びとは何か」といった学習論の転換であり、それは社会構成主義に立つ「学び論」に依る授業づくりを目指すものである。

社会構成主義に立つ「学び論」について、佐伯（1995）は学びを「文化的実践への参加」と定義し、これまでの文化的遺産を獲得する学習との違いを指摘している。また、佐藤（1995）は、対象・自己・他者の三つの対話的实践を学びとして定義している。学び論から授業づくりを考えた時、子どもが参加する実践が文化として正統的であるかが最も重要であり、佐藤（2012）も対話の対象として、真性の学び（教科の本質に即した学び）の設定を学びの要件として位置づけていることに鑑みると、体育授業では、取り扱う文化の正統性、すなわち運動の文化的な価値を吟味し、対象として設定することが不可欠といえる。しかし、これまでの体育授業では、

①「活動あって学習なし（学習内容の不在）」、②「学習者の意欲を喚起する授業（行き過ぎた主体主義）」、③「言語活動に傾倒した体育授業（運動量の減少）」、④「仲間づくりとしての体育授業（体育の道徳化）」が問題として挙げられているように（岡野・青木、2018）、文化としての正統性が問われず、対象性が喪失した授業が行われている実態が見られている。

本稿で取り扱うバレーボールにおいても、文化的遺産の獲得の立場からレシーブやスパイクといった動きやフォーメーションといった戦術の獲得を目指す授業（例えば、合田ら、2008）や、岡野・青木（2018）が指摘する問題が表出している授業が散見される。一方で、先人が参加してきたバレーボールの実践から学習内容を導き出している研究や実践が見られている。

例えば、松田（2001）は、運動を動きではなく、「一つの固有のおもしろい世界」とし、松田（2016）はオリンピック選手から幼稚園の子どもまでに共通の、いわば「最大公約数」にあたる本質的意味として、バレーボールを、落とさずに組み立て、落とすことがおもしろい運動としている。また、鈴木ら（2010）は、球技の競争目的達成を企てる運動者に立ち現れる競争課題を明ら

* 三重大大学教育学部附属中学校

** 三重大大学教育学部

かにし、その解決過程を整理することで、「関係論的な運動認識を基調とする価値体系論の視座からアプローチする道が用意された」と述べ、鈴木（2018）では、ゲームの目的をボールを目標地点に運ぶこととした上で、循環・分業型としてバレーボールを位置づけている。ここでの目的地とは、得点につながるコートを目指していると推測される。

バレーボールは、1895 年にモーガン（W.G.Morgan）が考案した初期のルールから、状況に応じて様々なルールの改正が行われてきたが、ボールを自陣コートで床に落とすことなく相手コートに打ち返すという部分は変化していない（吉田，2015）。つまり、今日に至るまで、「（得点を取るために）相手コートにボールを落とそうとする」という攻撃側の目的と「（得点を取られないために）自陣コートで床に落とすことなく相手コートに返そうとする」という守備側の目的の中で、技術や戦術が生まれてきている。このように、バレーボールの歴史の変遷を見ると、松田（2016）や鈴木（2018）が価値として設定していることと一致していることが分かる。

上記のように、先人から現代まで受け継がれてきている運動の共通点を導くほかに、もう一点、バレーボールの文化的な価値を検討する上で、西村（1989）の遊び論が示唆的である。西村は、遊びをある特定の活動として捉えるのではなく、関係の視点からその独特のありかた、存在様態、存在状況として捉えており、その独特の関係を「遊戯関係」と呼んでいる。バレーボールの歴史の変遷を追うと、ルールの変更や技術・戦術によって攻防を特徴づける関係が変化してきていることが見てとれる。

攻撃では、強烈なスピードとドライブがかかったスパイクが生まれ、守備ではブロックとしてネット際で相手の攻撃を防ぐ戦術が生まれることで、激しいラリーの応酬戦が行われるようになっている。そこから、ブロックレベルの向上に伴い、「速攻」「フェイント」「ブロックアウト」など、ブロックを突破するための工夫が多くなされてきている。さらに、「時間差」「クイック」などと呼ばれる速攻コンビネーションも開発され、ゲームはよりスピーディーになり、ゲーム中の多様な変化への戦術的対応が必要となってきた（吉田，2015）。

このことは、バレーボールにおいて、「相手コートにボールを落とそうとする」という攻撃側の目的と「自陣コートで床に落とすことなく相手コートに返そうとする」という守備側の目的は共通しているものの、その攻防を特徴づける遊戯関係が、「床を奪い合うこと」から「ネット際（面）を奪い合うこと」に変化していると見ることができる。

そこで、バレーボールの授業実践について、バレーボールの攻防の局面・中心をどこに置いているかという視点でNII 論文情報ナビゲータ（Citation Information by NII）のデータベースより先行研究を見てみる。すると、ラリーの継続や空いている場所をねらった攻撃を目指した実践（例えば、矢藤ら，2007；小田ら，2015；内田ら，2016）や、スパイクでの攻撃や三段攻撃を目指す実践（例えば、三宅ら，2011；竹田・北村，2002）が見られたが、いずれも攻防を特徴づける遊戯関係を「床を奪い合うこと」として捉えている実践といえる。

現代に近づくにつれて、「ネット際（面）を奪い合うこと」の攻防が関係の中核になっているにもかかわらず、その文化的な価値の変化に着目し、実践を行っている研究は見られない。この変容を明らかにすることは、バレーボール授業の質の保障や高まりについての検討、すなわちバレーボールにおける「深い学びとは何か」という見方・考え方に繋がると考えられる。

そこで本稿では、バレーボールの文化的な価値を再検討するとともに、中学第3 学年の実践をもとに、生徒が文化的な価値を学んでいく過程を事例から明らかにすることを目的とする。

1. 2 方法

第1 に、吉田（2015）、鈴木ら（2003）を基にバレーボールの歴史の変遷を概観し、文化的な価値を整理する。また、岡野・山本（2012）が提出した「体育における対話的学び」のデザインの視点とその手順に基づき、中学第3 学年のバレーボールの授業をデザインした。さらに、そのデザインに基づいて実践した授業概要を記載した。

第2 に、対象授業について形成的授業評価（高橋ら，2003）により授業を診断し、本実践が生徒に受け入れられたものであったかどうかを確認した。また、生徒の変容を、「授業実践（参与観察）－記録－記述－考察」の順で検討を行う。記録は、バレーボールの運動過程の様子や生徒たちの会話、授業者と生徒のやりとりなどを中心に、デジタルビデオカメラで撮影した。記述は、デジタルビデオカメラによる記録を用いながら、エピソード記述（鯨岡，2005）で表記した。エピソードは、学びの生起の場面を中心に、授業者が記述を行った。その際、授業者の表記は「私」とし、生徒はすべて全て仮名で表記した。生徒や授業者の発言は鉤括弧で表記した。エピソードのタイトルは、加納ら（2014）を基に、『変容前の姿』から『変容後の姿』へと質の変容をタイトルとしてつけた。なお、解釈は、エピソード記述に基づきながら、第1 筆者と体育科教育学研究及びエピソード記述を中心とした質的研究に従事している大学教員2 名（第2・3 筆者）とバレーボールを専門とし

た研究に従事している大学教員 1 名（第 4 筆者）の計 4 名で合議しながら行った。

第 3 に、バレーボールの文化的な価値を再検討するとともに、中学第 3 学年の実践をもとに生徒が文化的実践に参加する過程について考察した。

2. 授業デザイン

2.1 「運動の中心のおもしろさ」の設定

バレーボールは、1895 年にモーガン (W.G.Morgan) が考案した初期のルールから、状況に応じて様々なルールの改正が行われてきたが、ボールを自陣コートで床に落とすことなく相手コートに打ち返すという部分は変化していない (吉田, 2015)。つまり、今日に至るまで、「(得点を取るために) 相手コートにボールを落とそうとする」という攻撃側の目的と「(得点を取れないために) 自陣コートで床に落とすことなく相手コートに返そうとする」という守備側の目的の中で、技術や戦術が生まれているとみることができる。

ルールと戦術の変遷を見ていくと、まず 1922 年にボールに 3 回を超えて触れることのできないスリーストローク制が導入された。その後、世界選手権が行われるようになり、それにより戦術も変化してきている。スパイクは強烈なスピードとドライブがかかった技術に変化し、ブロックにジャンプするようになり、激しいラリーの応酬戦が行われるなどゲームの様相は変化していた。

1949 年に国際ルールが確立されると、世界選手権が開催され、バレーボールは FIVB を中心に世界的に発展していった。この時代の技術・戦術的な特徴は、外から攻めるオープン攻撃であった。その高さとパワーに対抗するために「速攻」「フェイント」「ブロックアウト」などの戦術開発が進んだ。1965 年にブロックのオーバーネットが許容されるようになると、それまで守備的技術であったブロックが、攻撃的要素をも兼ね備えるようになった。また、ブロックレベルの向上に伴い、これを突破するための工夫が多くなされた。1965 年から 1971 年にかけて日本男子チームは、「時間差」「クイック」などと呼ばれる速攻コンビネーションを開発した。これらは威力を発揮し、その後世界中の国々で取り入れられ、攻撃は多彩化、スピード化された。

1998 年のルール改正でラリーポイント制とリベロプレイヤー制度が導入された。その結果、ゲームはよりスピーディーになり、ゲーム中の多様な変化への戦術的対応が必要となった。そして、「すべてのアタッカーがクイッカーとなって、それぞれ別の位置から一斉にシンクロして助走を開始することで目の前のブロッカーをひきつけ、数的に優位な状況を作り出して他のアタッカーを助ける」というシンクロ攻撃に、オフェンスは

発展した (吉田, 2015)。

以上のことから、バレーボールの歴史的な変遷を紐解いていくと、攻防の中心が、はじめは「床を奪い合うこと」にあったが、「ネット際(面)を奪い合うこと」へと変遷していき、現代では、「複数対複数の駆け引きを含んだネット際(面)を奪い合うこと」へと変遷していったと整理できる (表 1)。

表 1 バレーボールの歴史的・文化的変遷

期	1895	1922	1949	1965	1998
ルール	創案期 ・落とさない	国際選手権 ・スリーストローク制	国際ルールの確立	オリンピック正式種目 ・オーバーネットの許容 ・アンテナの設置	現代 ・ラリーポイント制 ・リベロの導入
戦術	・確実なレシーブ	・強烈なアタック ・ブロックの出現	・オープン攻撃 ・速攻 ・フェイント ・ブロックアウト	・長身化 ・速攻コンビネーション 「時間差」「クイック」	・スピーディー ・分業制 ・バックアタック ・多様な変化への戦術的対応
攻防の中心	「床を奪い合うこと」		「ネット際(面)を奪い合うこと」		「複数対複数の戦術的駆け引きを含んだネット際(面)を奪い合うこと」

そのため、本実践ではバレーボールの文化的な価値を「床を奪い合うこと」から、床を奪い合うことを土台としながら「ネット際(面)を奪い合うこと」と捉えた。

2.2 「わざ(身体技法)」の設定

鈴木ら (2003) のバレーボールの構造的特性より、バレーボールにおけるわざ(身体技法)には、自コートのネット上の面に位置づけ、その面をなるべく自チームに有利な形でボールが通過していく(突破する)ようにする攻撃側のものと、それに対し、ネットの上のボール通過を阻み(ブロック)、さらにそのボールを自コートに落下する前に拾い上げ、ゲームを継続させるようにする防御側のものの 2 つの視点が必要であると述べている。

そこで、本実践では、攻撃側の複数回触球による攻撃準備(組立)を生かしたネット際(面)の突破を試みる攻撃、守備側のそれを防ぐブロックや空いているスペース(床)をつくらないポジショニングを身につけていきたいわざ(身体技法)として設定した。

2.3 「課題」の設定

本実践では、現代のバレーボールの文化的な価値にまで触れることができるようにするために、「相手にブロックされない攻撃をしよう」という課題を設定した。相手のブロックをいかに振り切るかという視点で、個人の戦術に加え、セッターと 2 人以上のアタッカーとの速攻コンビネーション攻撃を中心に相手との駆け引きを大切にしながらゲームに取り組みせていった。

この内容で授業を構成していくために、現代のバレーボールと同じ環境に近づけるための足場として次の 2 つの環境を設定した。1 つ目は、レシーブとトスの技術の簡易化である。本来、この内容で授業を行うなら、

確実なレシーブと正確なトスが必要になる。しかし、バレーボールを中学校ではじめて学習する生徒たちにとっては難易度が高い。それでも「ネット際（面）を奪い合うこと」を中心とした攻防を学んでいくために、レシーブとトスの技術を簡易化した「キャッチバレー」を行う。「キャッチバレー」では、相手からのサーブやアタックと味方からのパス（2 打目）をキャッチしてからパスをしてもよいというルールとした。そうすることで、ミスにより床（落下地点）を奪われず、セッターのトスも安定したトスになり、スパイクでの攻撃をしやすくした。2 つ目はネットの高さである。現代のバレーボールでは、選手の身長が進んでいる（吉田，2015）。そのため、全選手がスパイクを打てる状況になっているといえる。しかし、生徒の身長とネットの関係を見ても、正規のネットの高さ（男子：2m30cm，女子：2m15cm）では、全生徒がスパイクを打てる状況にはなっていない。そのため、全日本のバレーボール選手とネットの高さの割合から、現代のバレーボールと同じ環境になるように計算をし、ネットの高さを男子は 2m05cm，女子は 1m85cm と設定した（表 2）。

表 2 ネットの高さ

男子			
	平均身長	ネット	割合
日本代表	190	243	1.278947
↓ 同じ割合で考える			
中三	166	212.3053	1.278947
166 × 1.27			
ジャンプ力を考慮-7			
2m05cm			
女子			
	平均身長	ネット	割合
日本代表	177	224	1.265537
↓ 同じ割合で考える			
中三	156	197.4237	1.265537
166 × 1.27			
ジャンプ力を考慮-12			
1m85cm			

2.4 授業概要

本実践は、2018 年 7 月 1～11 日に全 6 時間で行った。場所は A 県 B 中学校体育館で、授業者は、A 県 B 中学校保健体育科教諭が行った。運動者は、A 県 B 中学第 3 学年生徒 36 名で、ボールは柔らかい素材の「MIKASA レッスンバレー4 号 SLV4」を使用した。また、本実践の場は図 1 の通りである。

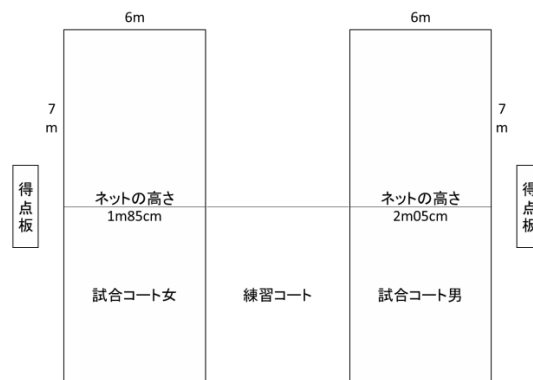


図 1 場の設定

○単元概要

第 1 時では、試しのゲームとスパイクの練習を行った。第 2 時では、守備を高めるためにブロックでの防ぎ方を学習してからゲームを行った。第 3 時では、スパイクの人数を増やして攻撃すること、守備側は 2 枚のブロックで相手の攻撃を止めることを視点にゲームをした。第 4 時では、相手のブロックをかかわすために速いテンポで攻撃することを視点にゲームを行った。第 5・6 時は、ブロックをされない攻撃をするために、ダブルクイックや時間差攻撃など、複数のスパイカーによるコンビネーション攻撃が見られた。また、ブロックを 2 枚とぶためのポジショニングなどといった守備側の連携したポジショニングの視点を提示した。

○ルール

ゲームの人数は、4 人对 4 人で行った。サーブは下投げで行い、レシーブとトスはキャッチしてから投げてもよいこととした。ゲームは 3 点マッチ 2 セット先取とし、デュースもありで行った。ローテーションは行わなくてもよいこととした。

3. 学びの実際

3.1 形成的授業評価の結果と考察

全 6 時間の授業評価は、4 つの項目の「総合」で、第 1 時は 3 点、第 2 時は 4 点、第 3 時から第 6 時までは 5 点満点を記録した（表 3）。第 1 時では、成果の項目が低く、総合も 3 点になっているが、第 1 時のため、ルールを理解することが目標であったためだと考えられる。第 2 時以降は、すべての項目が 4 点か 5 点となっている。これらのことから、本授業実践は概ね生徒たちに受け入れられた授業であったと推察できる。

表 3 形成的授業評価

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時
成果	2.09 2	2.53 4	2.71 5	2.71 5	2.81 5	2.83 5
意欲・関心	2.87 4	2.90 4	2.94 4	2.94 4	2.94 4	2.97 4
学び方	2.73 4	2.80 4	2.94 5	2.97 5	2.91 5	2.94 5
協力	2.83 5	2.90 5	2.91 5	2.97 5	2.91 5	3.00 5
総合	2.57 3	2.76 4	2.85 5	2.88 5	2.88 5	2.92 5

3.2 エピソード記述

エピソードは、全授業から 3 件を抽出した。〈ep.1〉は、「1 人 1 人のブロック」から「2 人でコース（面）を守るブロック」へ、〈ep.2〉は、「自チームの強いスパイカーによるアタック」から「相手チームのブロッカーをかわすアタック」へ、〈ep.3〉は、「打ちやすい位置に上げるトス」から「攻撃を組み立てるトス」への変容の記述である。

〈ep.1〉

「1 人 1 人のブロック」から

「2 人でコース（面）を守るブロック」へ

ヒロとトモヤは同じチームである。2 人は、第 3 時からネット際にポジショニングをし、相手のスパイクにブロックに行くことが多く見られていた。

第 5 時の場面である。相手のライトからのスパイクにヒロとトモヤがブロックにいった。このとき、ヒロは相手のセッターがライトのスパイカーに上げようとしたところから、ライトのスパイカーに合わせて助走をとり、ぴったりのタイミングでとぶことができていた。しかし、トモヤは、セッターがライトにトスを上げて、ライトのスパイカーがスパイクを打とうとジャンプしたのを見てからブロックにとびはじめた。そのため、トモヤのブロックはとぶのが遅れてしまった。その結果、2 人のブロックは、2 人の間に隙間があり、とぶタイミングもずれたものとなった。そのため、相手のスパイクは 2 人の手と手の間に打ち込まれ、レシーバーが手に触れることもできず、そのまま強く床にたたきつけられてしまった。私は 2 人に歩み寄り、「2 人の間が空いとるんやって。だからもっとキュッと寄って、この間を埋めない。」と声をかけながら、2 人の肩を寄せながら 2 人の距離を近づけさせた。2 人は肩が触れ合うくらいの距離で、お互いに手をあげてブロックの姿勢をしてブロックのポジショニングの確認をしていた。

次のラリーで、相手からライトからのスパイクが打たれた。このとき、ヒロとトモヤの 2 人は、今度はピッタリくっついてブロックに行く準備をしていた。そしてセッターからライトにトスが上がったのを見ると、2 人は同じタイミングでライトのスパイカーの前に移動

し、ジャンプのタイミングも合わせてとぶことができていた。ボールはヒロのブロックに当たったが、惜しくもブロックアウトになってしまった。しかし、スパイクを打ち込まれることは防げたからか、2 人は満足そうな表情で、ブロックの手の角度を確認しながら次のプレイへと向かった。

第 6 時の場面である。相手チームにチャンスボールが上がった。相手チームはレフトとライトの両側にアタッカーを置いていた。そのため、ヒロとトモヤはその両方に対応できるように、ネット際の真ん中あたりにポジショニングしていた。セッターがレフトにトスを上げた。ヒロもトモヤもセッターがレフトにトスを上げたのを見て、レフト側に移動し、ブロックにとんだ。スパイクされたボールはトモヤの手に当たったが、そのまま大きくはじかれ、ブロックアウトになってしまった。トモヤはヒロに歩み寄り、何か声をかけて次のプレイの確認をしていた。その後、また相手チームにチャンスボールが上がる場面があった。ヒロとトモヤは 2 人そろってネット際の中央付近にポジショニングをとった。相手チームはレシーブしたボールをセッターに渡した。相手のセッターは、ボールを受け取るとそのままライトにトスを上げた。トモヤとヒロは、セッターがライトに出すとわかった瞬間に、トモヤが「左。」と言って、2 人そろって左にワンステップ分移動し、2 人でブロックに行った。2 人のブロックのタイミングはピッタリ合っていた。さらに、2 人のブロックの間もピッタリと埋まっていた。ボール 1 つ分の隙間も空いていなかった。ボールはヒロのブロックにあたった。しかし、ヒロのブロックがネットを越えていなかったため、当たったボールはそのまま自陣に吸い込まれてしまった。ヒロは、「わー」と叫びながら悔しがったが、トモヤとともにスパイクのコースをふさぐことはできていたためか、今までやられていた時とは違い、明るい表情で次のプレイへと向かっていった。

〈ep.2〉

「自チームの強いスパイカーによるアタック」から

「相手チームのブロッカーをかわすアタック」へ

ユウヤとハルキとタカとシンは同じチームである。ユウヤは身長が高く、第 1 時から強いスパイクを打っている生徒である。

第 2 時の場面である。ユウヤのチームは、相手のアタックをキャッチした。ユウヤは、アタックをキャッチしたシンに「前、前、前」と言いながら、セッターのタカを指差した。それを聞いたシンは、ボールをセッターのタカに渡した。タカはボールを受け取ると、迷わずユウヤにトスを出した。ユウヤは、トスに合わせて強いスパイクを打ち込んだ。この時、味方のハルキとシンは、

ユウヤに完全に任せたという感じでユウヤのスパイクを見守っていた。相手チームは、1人がブロックにとんではみたものの、体を半身にして片手だけを出しただけのものであり、ユウヤのスパイクは強く相手コートにたたきつけられた。

第3時の場面である。ユウヤのチームは、サーブをキャッチすると、またもセッターのタカに渡し、ユウヤのスパイクで攻撃をしようとしていた。見ていた私は、ボールがセッターにわたると同時に、「来るよ。もう来るのわかつとるやん。」と相手チームのブロッカーにユウヤのスパイクをブロックするように言葉をかけた。ブロッカーの2人は、なんとか対応してブロックにとんだものの、ユウヤのスパイクを怖がってしまい、ネットから離れた位置でとんでしまったため、手をネットの上に出すこともできなかった。そのため、またしてもユウヤのスパイクは強く床に突き刺さった。私は、すぐにブロッカーの2人のところに歩み寄り、もっとネットの近くでとぶことと、手をネットの上で前に出すことを確認した。その後も、各チームに同様の指導を積極的に行い、ユウヤの強いスパイクを何とか止められるように練習を行わせた。

第4時の場面である。ユウヤのチームは、サーブをキャッチすると、またもタカに渡し、ユウヤのスパイクで攻撃をしようとしていた。私は、ブロックをする側のチームに対し、「また来るよ。それ止めよう。」と声をかけた。今度は、2人のブロッカーがしっかりとユウヤの前に立ち、目一杯手を伸ばしてブロックをすることができた。ユウヤのスパイクはブロックにあたり、ユウヤのチームの陣地に落ち、ブロックポイントで相手に得点されてしまった。ユウヤは初めてブロックをされたため、困惑しているように見えた。その後、同じようにスパイクを打とうとする場面もあったが、ユウヤには常にブロックが2枚ついていたため、ユウヤは強いスパイクを打つことができず、フェイントのような緩い返球しかできず、この試合は負けてしまった。

試合に負けてしまったユウヤのチームは、練習コートに練習をしに来た。私は、ユウヤのチームをホワイトボードのところに集めた。そして、「(攻撃が) バレバレなんだって。ユウヤ全部ダブルで(ブロック) つかれてるやん。散らしていかないと。」と伝え、作戦ボードの磁石を動かしながら、複数のアタッカーでブロックを振るという視点を与えた。その後、ユウヤのチームは練習コートでライトにハルキをおき、ライトとレフトで打ち分ける攻撃を練習し始めた。

第6時の中盤の場面である。セッターのタカは、ボールを受け取ると、迷わずユウヤにトスを上げた。しかし、相手に完全に読まれて、2枚のブロックにつかれてしまった。ユウヤはスパイクを打つコースがないこと

に気づき、即座にフェイントで逃げた。そのためブロックポイントはとられなかったが、相手のレシーバーに取られてしまった。同じラリーの中で、もう一度ユウヤのチームにチャンスボールがきた。タカははじめ、完全にユウヤの方を向いていたが、今度はライトのハルキにトスを出した。相手のブロッカーも即座に対応しようとしたが、はじめにユウヤについていたため、ブロックが1枚しかつかなかった。ハルキは1枚のブロックをかわすようにクロスに打ち込み、得点をあげることができた。得点が決まった瞬間、ユウヤは、「よっしゃー。」と声をあげて、ハルキにハイタッチをしにいった。

〈ep.3〉

「打ちやすい位置に上げるトス」から

「攻撃を組み立てるトス」へ

イサミとシュウとソウは同じチームである。イサミは第1時から試合の場面でセッターをすることが多く、第3時から固定したポジションとしてセッターをしている生徒である。

第2時での場面である。シュウは相手の攻撃をキャッチすると、一旦周りを確認した後、セッターのイサミにふわっとボールを渡した。イサミは、胸のあたりでボールを受け取ると、一旦腰のあたりまでボールを下げて、右手だけでふわっとシュウにトスを上げた。シュウはイサミが投げたボールにタイミングを合わせてスパイクを打とうとしていたが、どこかうまくタイミングが取れないでいた。

第3時のはじめ、各チームでセッターとスパイクを合わせる活動を行っている場面である。イサミのチームは、イサミをセッターとしてスパイク練習を行っていた。はじめ、イサミは下から前時と同じようにアタッカーに下投げでトスを上げていた。しかし、下投げでふわっと上げたトスにアタッカーがタイミングをうまく取れずにいた。そこで私は、イサミに「オーバーで上げてみな。この方が打つ方もタイミング取りやすいで。」と言って実際に見本を見せて、シュウにスパイクを打たせてみせた。イサミは早速、オーバーでトスを上げるようにしていった。はじめはタイミングが合わなかったが、アタッカーとタイミングを合わせるために膝を使ってトスを上げるようになっていった。

その後の試合で、イサミのチームにチャンスボールが来た。キャッチをしたシュウは、すぐにイサミにボールを渡した。ボールはイサミの胸のあたりであったが、イサミは膝を使って下に潜り込むような動きをし、ボールを額の前で受けた。そして、そのまま膝を伸ばすと同時にシュウにオーバーでトスを上げ、シュウはタイミングよくスパイクを打つことができた。

第4時のはじめ、各チームでスパイク練習を行って

いる場面である。イサミのチームは、セッターにボールを渡すところからスパイク練習を始めていた。シュウはボールを受け取ると、イサミの額のあたりをめがけて、少し低くめにまっすぐめなボールを返した。イサミは、額の前に来たボールに対し、膝を使ってボールの下に潜り込み、額の前でボールを受けてトスを上げた。シュウはイサミにボールを渡すと同時に走り出し、クイックで打つ練習をしていた。

第 6 時の場面である。試合の中で、イサミのチームにチャンスボールが来た。キャッチをしたシュウは、すぐにイサミにボールを渡した。シュウはボールをイサミに渡すと同時に、クイックのタイミングでライトからスパイクに入った。イサミはそれに反応し、オーバーハンドですぐにトスを上げた。シュウはそれをクイックで打ち込み、得点をあげることができた。次のチャンスボールも、シュウのライトからのクイックにトスを上げた。しかし、相手のブロッカーに読まれており、ブロックにかかってしまった。相手のブロックにあたったボールは大きくはじかれ、コートのごりぎり外に出て、ブロックアウトになった。イサミは拍手をして得点を喜びながらも、「危ない。危ない。」と言った。次のチャンスボールで、またもシュウからイサミにボールが渡った。シュウは同じようにライトのクイック攻撃に入った。しかしイサミはシュウのクイック攻撃を使わずにレフトにトスを上げた。相手のブロッカーは、2 人ともシュウにつられてライト側のブロックについていた。レフトに上げられたボールは、ソウがセミクイックのタイミングで相手コートに打ち込んだ。レフト側にはブロッカーが誰もいなかったため、ソウのスパイクが決まり得点を決めることができた。私は、ソウにトスが上がった瞬間に「ナイス」と叫んだ。私を含め、試合を見ていた人たちは、フリーのソウにトスが上がった瞬間にこのラリーはイサミのチームがとったと思った。

4. 考察

4. 1 「バレーボールの文化的な価値」への参加

〈ep.1〉で、レシーバーが触れることもできず、強く床にたたきつけられていたことを受けて、ヒロとトモヤはブロックによるネット際の守りを優先するようになってきている。これは、床だけを守っているのでは失点してしまうことから生まれた「ネット際（面）を守ることの必要性」だと捉えられる。

〈ep.2〉では、はじめはユウヤの強いスパイクを中心に攻撃していた。しかし、相手チームのブロックの技術が上がってくるとともに、今まで取れていたネット際の面がふさがれてしまうようになった。そのため、そこに「ネット際（面）を奪うことの必要性」が生まれた。そして、〈ep.2〉〈ep.3〉においてスパイカーを複数人配

置して、「ブロッカーをふる」攻撃へと変容していった。さらに、〈ep.2〉でハルキは、1 人のブロッカーにつかれながらも、相手のブロックを交わすようにクロスに打ち込んでいる。これらは、ネット際の面を奪って相手コートにスパイクを打ち込むかという「ネット際（面）を奪い合うための戦術的駆け引き」を含んだ攻防といえる。

上記では、攻防の中心が、「床を奪い合うこと」から「ネット際（面）を奪い合うこと」へ、さらに複数対複数の戦術的駆け引きを含んだ、「ネット際（面）を奪い合うこと」へと広がりを見せている。

また、これらの広がりが見られたことは、「床を奪い合うこと」から「複数対複数の戦術的駆け引きを含んだネット際（面）を奪い合うこと」を含む幅をもった世界、すなわち生徒の発達の最近接領域（ヴィゴツキー、2003）にあった環境によって、誰もがバレーボールの文化的な価値へ参加しやすくなったためではないかと考えられる。その大きな要因は、本実践が、現代のバレーボールの文化的な価値である「ネット際（面）を奪い合うこと」を想定した環境のデザインにあると考えられる。

4. 2 「バレーボールの文化的な価値」の学びの高まり

〈ep.3〉で、はじめのシュウのスパイクはセッターのふわっとしたトスに合わせて打つものであった。しかし、第 4 時からクイックでスパイクを打ち込んでいる。これは、シュウのスパイクにおけるセッターのボールリリース時からアタッカーインパクト時までのトス時間が短くなったことになる。また、セッターのイサミのトスも変容している。はじめは胸のあたりでボールを受け取り、一旦腰のあたりまでボールを下げてから、ふわっとトスを上げている。しかし、シュウにタイミングを合わせてトスを上げていくうちに、膝を使ってボールの下に潜り込み、額の前でボールを受けてトスをするようになり、最後にはほぼオーバーハンドトスになっている。そのため、イサミがボールを保持する時間が短くなり、攻撃時間を短くすることができている。

それに応じて、守備側にも変容が起きている。〈ep.1〉では、想定される相手のレフトとライトからの攻撃に対し、セッターがどちらにトスを上げるのかを早い段階で判断し、ブロックに行くかが重要になっている。この中で、トモヤは相手のセッターの動きを見て、攻撃がどちら側に来るかを予測し、ブロックに行くことができるようになってきている。これは、短い攻撃時間によるアタックが生まれ、それらにどう対応していこうかと戦術的な駆け引きを学んでいく中で生まれてきた変容である。

攻撃時間の短縮に関して、橋原ら（2009）は、当時の世界ランキング 1 位のブラジルと世界ランキング 2 位

のイタリアの戦術プレーを分析し、攻撃時間をセッターリリース時からアタッカーインパクト時までの各トス時間からまとめている。このことから、攻撃時間が短くなることはバレーボールにおける文化的な価値の質的な高まりであり、生徒の学びが深まったといえる。

また、〈ep.2〉と〈ep.3〉では、攻撃のバリエーションが多彩化することによってネット際（面）を奪い合うための駆け引きをしている。特に〈ep.3〉では、はじめはシュウとイサミのタイミングを合わせるというコンビネーションの確認が行われている。そして、相手チームに予測されないように、ソウとシュウの 2 人のアタッカーを使い分け、相手のブロックをかわす攻撃になっている。これは、攻撃のバリエーションを増やすことで、いかに相手をだまし、ネット際（面）を奪うかという学びが深まったと見てとれる。

守備側でも、〈ep.1〉では、ヒロとトモヤの 2 人は相手のブロックに対して 3 つの確認をしている。1 つ目は、ブロックのポジショニングの確認、2 つ目はブロックの手の角度を確認、3 つ目は次のプレイの確認である。事例の状況からこれらを言い換えると、それぞれの「位置」の確認から、それぞれの「技能」の確認となり、最後は声をかけながら 2 人でブロックに行くための「コンビネーション」の確認と捉えることができる。

橋原ら（2009）は、ブラジルチームの攻撃パターンは全ローテーションを通じて 4 人のアタッカーのコンビネーション攻撃を行っていることも明らかにしている。このことから、いかに多くのアタッカーとコンビネーション攻撃をしているかという視点もバレーボールにおける文化的な価値の質的な高まりであり、生徒の学びが深まったといえる。

上記のように、「攻撃時間が短くなること」と「コンビネーション攻撃が生まれてきたこと」をきっかけに、より高度な駆け引きが生まれ、生徒の学びが深まっていったといえる。

5. 結論及び今後の課題

本稿は、バレーボールの文化的な価値を再検討するとともに、中学第 3 学年の実践をもとに生徒が文化的実践に参加する過程を事例から明らかにすることを目的とした。

まず、バレーボールの歴史的変遷から、攻防の中心が、「床を奪い合うこと」から「ネット際（面）を奪い合うこと」へ、さらに複数対複数の戦術的駆け引きを含んだ、「ネット際（面）を奪い合うこと」へと広がりを見せているため、バレーボールの文化的価値が「床を奪い合うこと」から、床を奪い合うことを土台としながら「ネット際（面）を奪い合うこと」に変容していることが明らかとなった。また、現代のバレーボールの文化的

な価値である「ネット際（面）を奪い合うこと」を想定した環境をデザインすることによって、「床を奪い合うこと」から「複数対複数の戦術的駆け引きを含んだネット際（面）を奪い合うこと」を含む幅をもった世界がつけられ、生徒全員が学びへ参加しやすいことが浮かび上がった。

さらに、バレーボールの文化的な価値を質的に深めていくチーム内の変容を見ていった結果、「攻撃時間が短くなること」と「コンビネーション攻撃が生まれてきたこと」がきっかけとなり、より高度な駆け引きが生まれていることが明らかとなった（表 4）。

表 4 バレーボールの文化的な価値

	学びの入り口	学びの高まり①	学びの高まり②
攻防の中心	「床を奪い合うこと」	「ネット際（面）を奪い合うこと」	複数対複数の戦術的駆け引きを含んだ「ネット際（面）を奪い合うこと」
きっかけとなった出来事	「落とさないこと」	ミスにより「床を奪われないこと」	「攻撃時間が短くなること」「コンビネーション攻撃が生まれてきたこと」
文化的な価値	ネット際（面）を奪い合うこと 床を奪い合うこと		

これらの結果は、バレーボールの文化的な価値は、歴史的・文化的な変遷によって変化しており、その価値の変化を捉えておくことによって、生徒の学びの深まりを見取ることができる視点となることを示唆する。

一方、本稿では、バレーボールの事例でしか述べることができていない。そのため、その他の球技においても同じ視点で見えていき、球技の文化的な価値の深まりを整理していくことが今後の課題といえる。

引用・参考文献

- 合田大輔・小林真紀・岡本昌規・高田光代・藤本隆弘・三宅理子・三宅幸信（2008）みんながスパイクを打てるバレーボールの授業：トスに重点を置いたパターン練習を中心として <第 2 部 教科研究>．中等教育研究紀要，広島大学附属福山中・高等学校 48：217-228.
- 橋原孝博・吉田康成・吉田雅行（2009）バレーボール男子世界トップレベルチームの戦術プレーに関する研究：2006 年男子世界選手権におけるブラジルおよびイタリアチームの分析．バレーボール研究．11（1）：12-18
- 加納岳拓・岡野 昇・伊藤暢浩（2014）体育におけるエピソード記述の描き方：学びの質的向上を目指して．三重大学教育学部研究紀要，自然科学・人文科学・社会科学・教育科学 65：223-231.
- 河合 学（2017）公益財団法人 日本バレーボール協会編 コーチングバレーボール（基礎編）．大修館書店，pp. 17-18.

- 鯨岡 峻 (2005) エピソード記述入門－実践と質的研究のために－. 東京大学出版会.
- 松田恵示 (2001) 「かわり」を大切にしたい新しい体育授業. 松田恵示・山本俊彦編. かわりを大切にしたい小学校体育の 365 日. 教育出版, pp. 2-5.
- 松田恵示 (2016) 序章 「体育を教える」ということ. 松田恵示・鈴木秀人編. 教科教育学シリーズ 06 体育科教育. 一藝者, pp. 10-20.
- 三宅理子・岡本昌規・合田大輔・高田光代・藤本隆弘・三宅幸信・児玉隆弘・平山雄造 (2011) 役割行動を学ぶバレーボールの授業研究：4 対 4 のメインゲームを通して <第 2 部 教科研究>中等教育研究紀要：広島大学附属福山中・高等学校, 51 : 237-246.
- 西村清和 (1989) 遊びの現象学. 勁草書房, pp. 31-32.
- 小田啓史・東川安雄・齊藤一彦・岩田昌太郎 (2015) 小・中学校の学びをつなげる球技「ネット型」のカリキュラム開発：「キャッチ」を取り入れた簡易ゲームの実践を通して. 中学教育：研究紀要, 広島大学附属東雲中学校 46 : 65-72.
- 岡野 昇・青木 眞 (2018) 体育における「主体的・対話的で深い学び」に関する考察. 三重大学教育学部研究紀要, 教育科学 69 : 259-266.
- 岡野 昇・山本裕二 (2012) 関係論的アプローチによる体育の授業デザイン. 学校教育研究, 27 : 80-92.
- 太田洋一・射延友季・三橋俊文 (2015) バレーボール競技におけるブロックとセット取得との関係. 健康医療科学研究, 5 : 1-8.
- 佐伯 胖 (1995) 文化的実践への参加としての学習. 佐伯 胖ほか編. 学びへの誘い. 東京大学出版会, pp. 1-48.
- 佐藤 学 (1995) 学びの対話的实践へ. 佐伯 胖ほか編. 学びへの誘い. 東京大学出版会, pp. 49-91.
- 佐藤 学 (2012) 学校を改革する：学びの共同体の構想と実践. 岩波ブックレット, p. 33.
- 鈴木 理 (2018) 球技における攻撃と防御の認識論的検討. 体育・スポーツ哲学研究, 40 (1) : 25-33.
- 鈴木 理・青山清英・岡村幸恵・伊佐野龍司 (2010) 価値体系論的構造分析に基づく球技の分類. 体育学研究, 55(1) : 137-146.
- 鈴木 理・土田了輔・廣瀬勝弘・鈴木直樹 (2003) ゲーム構造からみた球技分類試論. 体育・スポーツ哲学研究, 25-2 : 7-23.
- 高橋健夫・長谷川悦示・浦井孝雄 (2003) 体育授業を形成的に評価する. 高橋健夫編著. 体育授業を観察評価する 授業改善のためのオーセンティック・アセスメント. 明和出版, pp.12-15.
- 竹田唯史・北村優明 (2002) 生涯学習へ発展する体育授業の試み：ソフトバレーボールの指導を例として. 生涯学習研究と実践：北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要, 2 : 119-129.
- 内田雄三・阿部伸行・荒木郁登・大津展子 (2016) 中学校におけるバレーボールのゲームパフォーマンスに関する事例的検討. 白鷗大学教育学部論集, 10 (1) : 287-301.
- ヴィゴツキー (2003) 土井捷三・神谷栄司訳. 「発達の最近接領域」の理論－教授・学習過程における子どもの発達. 三学出版
- 矢藤真二郎・神重修治・下町素文・木原成一郎・松田泰定 (2007) 小中一貫におけるネット型ボール運動の指導カリキュラム開発：ソフトバレーボールの発達段階における指導方法Ⅱ. 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 35 : 47-56.
- 吉田清司 (2015) 中村敏夫・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則編 21 世紀スポーツ大事典. 大修館書店, pp. 1209-1215 .